

ごあいさつ

例年、この「研究集録／実践報告」は11月半ばに県内各地区持ち回りで開催する「山口県知的障がい施設福祉振興大会」に合わせて編集、発行しています。しかしながら、今年度は日本知的障害者福祉協会等主催の「第56回全国知的障害福祉関係職員研究大会」を本会の引き受けで、山口市において11月14・15・16日に開催するために、今年度の振興大会は全国大会と併催とし、またそれに伴い「研究集録／実践報告No.51」の編集、発行については全国大会後に予定しておりましたので、この時期の発行となりました。

このような例年にない今年度の事業実施状況をご理解いただき、この「研究集録／実践報告No.51」をお読みいただければと思います。

今年度は会員施設・事業所から34編の応募がありました。

その34編には「障害者支援」に携わる職員としての在り方について、私の心に残る文章がたくさんありました。その中からいくつかを以下にご紹介します。

- ・……、できないと決めつけるのではなく、できるように職員が試行錯誤しながら支援を考えることが重要であると感じました。
- ・細かくアセスメントを取ることの重要性を強く感じ、職員皆で情報を共有し、同じ対応をすることが大切だと思いました。
- ・Aさんの気持ちをまずは受容しようという姿勢に欠けていたように思える。
- ・Aさんに限らず施設で生活する利用者の人生に積極的に関わる仕事に就いている我々の態度の大切さや責任の重さを痛感した。
- ・理学療法士が勤めていることの意義や今後の可能性について、他の職員を巻き込んで考えることができ、貴重な学びとなった。
- ・栄養士も支援の一員である。このような事例を自分自身のストレングスにし、今後の食事支援に役立て、取り組んでいきたい。
- ・利用者は友達同士や集団の中で、自分の思いを伝えられずに我慢している……。
- ・支援者が利用者の発する言語の表面的な部分だけを捉えて支援していたことが、本人の混乱につながったためではないかとおもわれる。
- ・利用者を理解する。思いを汲み取る。支援者として当たり前のことを、担当になるまで行っていなかった自分自身が恥ずかしく……。
- ・支援の在り方ひとつで利用者の人生は良くも悪くもなるものだと思ひ、この仕事の責任の重さを感じた……。

皆様にはこの『研究集録／実践報告 No.51』をしっかりお読みいただき、その内容を共有していただきたいと思います。そして、それらをてこにして、それぞれの支援現場でのより良い利用者支援の構築に努力していただきたいと願います。

なお、今回は愛護賞（1点）、愛護奨励賞（3点）に加えて、会長特別賞（3点）を設けました。全施設・事業所に共通する取り組むべき内容だと思いますので、施設内研修等で是非参考にさせていただきたいと思います。

今回、原稿を応募していただいた施設・事業所の皆様、また年度末に向かう忙しい中、編集、発行に携わっていただいた編集担当施設・事業所の皆様に厚く厚く御礼申し上げます。誠にありがとうございました。

平成31年2月

一般財団法人 山口県知的障害者福祉協会
会 長 古 川 英 希